



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム

社会的孤立・孤独の予防と 多様な社会的ネットワークの構築

2023年度公募について

2023年4月



科学技術振興機構



■ 伝統的なつながりからの解放

→ 集団の結びつきが希薄化し、自己責任のもとに帰される

■ 社会構造の変化

→ 社会的孤立・孤独の問題が顕在化。健康悪化や自殺といった深刻な事態、相互の無関心により犯罪被害リスクが高まる。

■ オンライン化や仮想空間の浸透

→ そこに居場所を見出すこともあれば、別の排除やいじめが生まれる

等々

新しい状況下で社会的孤立・孤独メカニズムを検証し、
予防につなげる必要がある

社会的孤立・孤独を社会として考える



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

- 社会的孤立・孤独を個人の問題としてのみ取り上げるのではなく、**社会規範、制度・政策、文化や風土などの社会・環境条件との関連の中で考える**
- 目標とするのは・・・
社会としての、 孤立を生まない多様なつながり・ネットワークの構築/
孤立してしまう主体にとっての、 多様なつながり・ネットワークの構築
- **社会的孤立を主軸**におきつつ、孤独や社会的排除、あるいは幸福度やウェルビーイングといった関連する概念も含めた**多角的な視点**で研究開発を推進

「見えにくい」社会的孤立・孤独に取り組む



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

■見えにくい（不可視性）という特徴

- そもそも社会的つながりを失っており周囲から見えにくい
 - コロナ下で対面接触が減少してしまい見えにくい
 - 孤立感・孤独感という個人の主観・内面を捉える事が困難で見えにくい
- さらに
- 支援事業も短期的・応急措置的な施策どまりとなることがある
 - 制度のはざままで、支援制度から外れてしまう人も多い
 - 個人情報保護等に配慮した当事者情報の取り扱いも必要 等の状況もあり

**社会・環境・時代も含めた視点で分析し、
社会的孤立・孤独の状況に応じた、再現性のある施策を
開発・実装するための方法論の確立が急がれる**



- 社会的孤立・孤独に陥る主体を取り巻く環境や状況に関連する情報から社会的孤立・孤独状態に陥るリスクを**可視化して測定**し、これに基づき**社会的孤立・孤独を予防**
- 顕在化した社会的孤立・孤独の状態にある人々への支援施策等に係る先行知見を活用しながらも、社会の構成員全体を対象にして社会的要因の改善を目指し、そもそも社会的孤立・孤独を生まない**社会的仕組みを創る**という、抜本的な予防としての**一次予防を重視**
- 社会的孤立・孤独の個人的なリスクのみならず、**社会の集合的な帰結**に対する取り組みを期待

横断的アプローチ



- 社会問題化する前の社会的孤立・孤独の特定の属性を対象とすることも重要だが、世代や属性に共通する要因に着目した、横断的なアプローチも重視

イメージ例

- ・ 地域社会を単位とした分析による、対人関係の希薄さと治安との関係性
- ・ 自然に人のつながりが生まれ、社会的孤立・孤独が生じにくいまちづくり、建築、物理的な設計ガイドライン
- ・ ICTによる仮想空間が社会的孤立・孤独に及ぼす正負の影響
- ・ コロナ下のように対面の活動が制限されたり、普段つながっていなかったりしても、危機の時には介入できるような制度設計
- ・ 災害時に言語・文化の違いや情報の不足等から在留外国人が取り残されないようにするコミュニティの在り方

※上記はイメージの例示に過ぎず、これに拘ることなく、プログラム目標の達成に貢献する新規性・独創性のある提案を歓迎します



- 人々の行動・心理・社会的背景の分析、さらには、社会的孤立・孤独とは何を意味し、そのこういった側面が問題であるかを精査するための歴史、哲学、人類学的な検討や、国際比較による社会的孤立・孤独を生む日本社会の特質の検証など、
幅広い人文・社会科学分野の知見も活用した根源的なアプローチ
- 社会的孤立・孤独を生むメカニズムの解明にとどまらず、各分野での個別の取り組みに横串を通し、
戦略的な施策の開発・実装につなげる、社会課題解決型の研究開発を推進
- **ICTや芸術など異分野との融合的な取り組み**も歓迎。特に自然科学的アプローチをとる際には、それを**社会に応用する際のリスクも含め、人文・社会科学的観点からの省察を踏まえた発展的提案**を期待

プログラム目標



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

- 人口減少・少子高齢化、経済変動など、様々な社会構造の変化を踏まえ、**社会的孤立・孤独のメカニズム**を明らかにすると共に、**社会的孤立・孤独を生まない社会像**を描出し、人や集団が社会的孤立・孤独に陥る**リスクの可視化や評価手法（指標等）**、社会的孤立・孤独を予防する**社会的仕組み**の研究開発を推進
- その際、開発した評価手法（指標等）も活用した、社会的孤立・孤独の予防施策の効果検証を含め、**PoC（Proof of Concept：概念実証）**までを一体的に行う
- 本プログラムの実施を通して、人・組織・コミュニティ間の**多様な社会的つながり・ネットワーク**を実現し、**社会的孤立・孤独を生まない社会**の創出を目指す

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な流行により、対面による直接的なコミュニケーションが困難となり、想定外の物理的な分断への対応が迅速かつ十分でないあらゆる場面で、社会的孤立・孤独の顕在化・深刻化。これまで社会的孤立・孤独から無縁だった人や集団も社会的孤立・孤独に陥るリスクが高まっている。

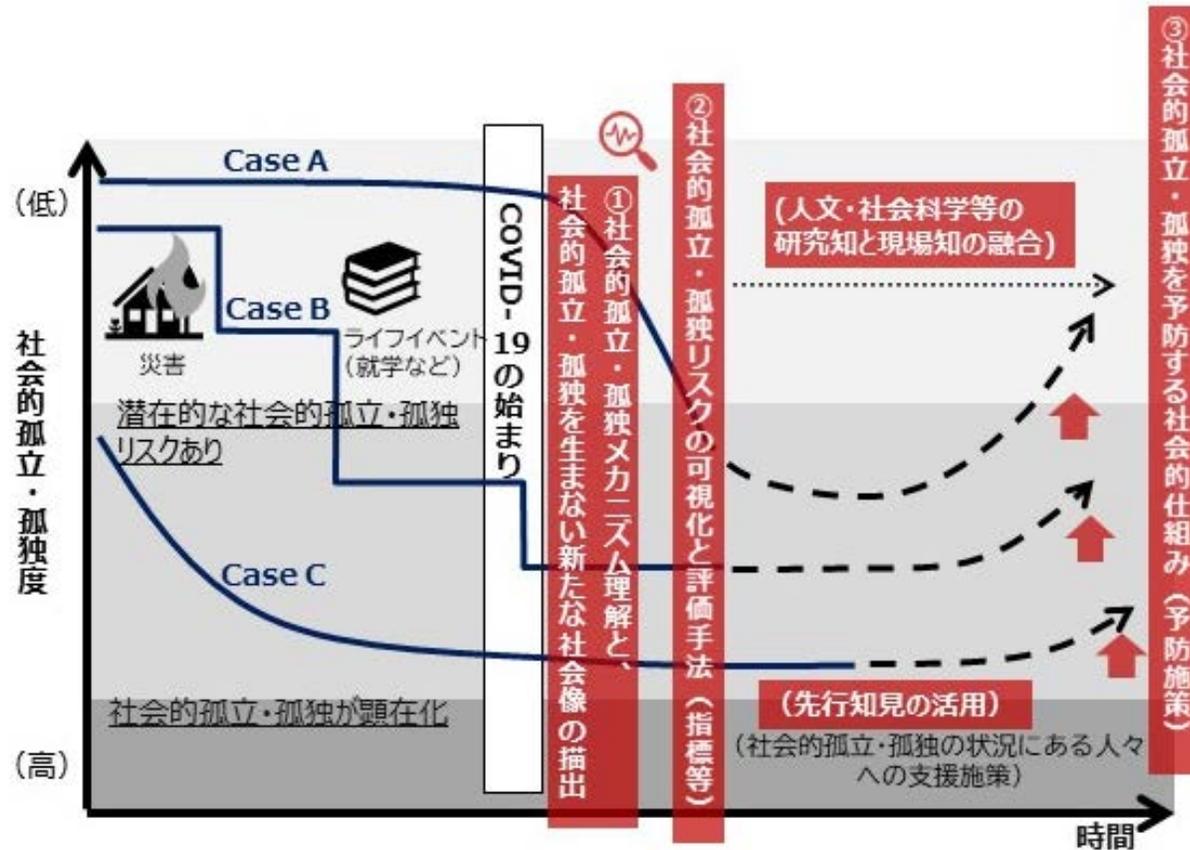


ウィズコロナ・ポストコロナの社会における望ましいつながり・ネットワークのあり方を追求し、これを積極的に構築していく必要がある

研究開発要素①②③の一体的推進



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築



①社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出

人や集団の行動、心理、社会的背景の検証から、どのようなメカニズムによって社会的孤立・孤独が生じるのか、社会的孤立・孤独の状況にある者の視点も考慮した社会のあり方を分析します。その結果を基に、予防すべき社会的孤立・孤独を明確にすると共に、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像を描出します。

②社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法（指標等）の開発

①で描いた社会像の実現に向け、まず人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクを早期にとらえるための可視化や評価手法（指標等）を研究開発します。

③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み

社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み（予防施策）を開発し、②で開発した社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法（指標等）も活用した評価・実証を、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどを対象に行います。

- Case A: 社会的孤立・孤独とは無縁だったが、COVID-19をきっかけに社会的孤立・孤独リスク増加
- Case B: 災害/ライフイベントをきっかけに社会的孤立・孤独リスクが徐々に増加し、COVID-19より更に悪化
- Case C: 所与の環境・障害により、例えば幼少期から社会的孤立・孤独リスク高

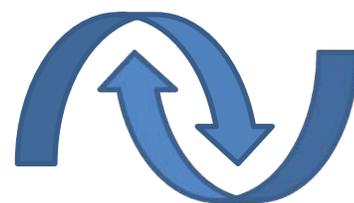
「厚生労働省、社会的排除にいたるプロセス～若年ケース・スタディから見る排除の過程～概要（内閣官房/内閣府提出資料）、第8回社会保障審議会生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会資料（平成24年9月28日）」を参考に、RISTEXにて作成

研究知と現場知の融合



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

■ 先行研究との違いを明確にして、**これまでになかった新たな仮説**をたて、その**PoC (Proof of Concept : 概念実証)**の場として**実践活動を展開**し、**新たな仕組み**につなげる



■ 従来の社会福祉、公衆衛生などの様々な現場で行われている取り組みで解決できていない問題点を抽出し、**実践・展開においても新規性のある研究開発**としていく

PoCと社会実装に向けた準備



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

- PoC（Proof of Concept：概念実証）：
国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどを対象に、開発した社会的仕組みを試行。開発した評価手法（指標等）も活用して、**評価・実証**
- 社会実装に向けた準備：
研究開発要素①②③を研究として**モデル化（条件が変わっても再現可能な状態）**し、少なくともこのモデルを、**想定される成果の受益者や、研究開発期間終了後も継続して研究開発や社会実装を進める担い手などに向けたデモンストレーション**を行うことまでを目標

（社会問題における有効な解決法が社会に導入（社会実装）されるには、制度的、経済的、あるいは社会心理的な障壁などにより、一定の時間を要することがあるため、本プログラムで設定する研究開発期間内での実現可能性を考慮）

プログラムのマネジメント体制



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

プログラム総括

■ 浦 光博

(追手門学院大学 教授/
広島大学 名誉教授)



プログラムアドバイザー

(五十音順 2023年3月時点)

■ 有末 賢

(亜細亜大学 都市創造学部 教授)

■ 石井 光太

(作家)

■ 稲葉 陽二

(元 日本大学 法学部 教授)

■ 宇佐川 邦子

(株式会社リクルート ジョブズリサーチセンター
センター長)

■ 岸 恵美子

(東邦大学大学院 看護学研究科 研究科長、教授)

■ 工藤 啓

(認定特定非営利活動法人育て上げネット 理事長)

■ 佐藤 嘉倫

(京都先端科学大学 人文学部 教授)

■ 平田 オリザ

(芸術文化観光専門職大学 学長)

■ 藤原 佳典

(東京都健康長寿医療センター研究所
社会参加と地域保健研究研究チーム チームリーダー)

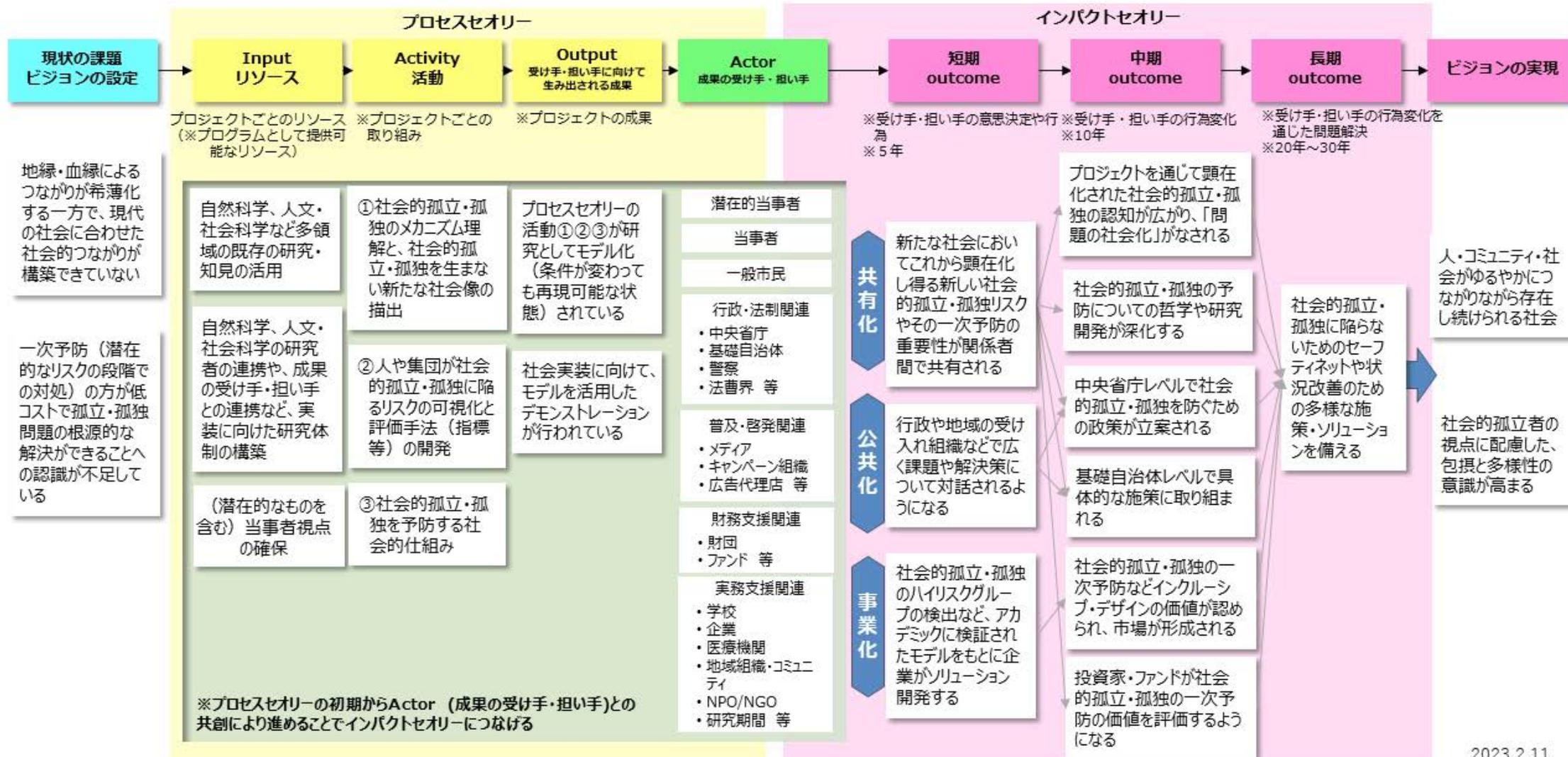
■ 遊間 和子

(株式会社国際社会経済研究所 調査研究部 主幹研究員)

プログラムのロジックモデル



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
**社会的孤立・孤独の予防と
 多様な社会的ネットワークの構築**



※本図は、本プログラムのビジョンや、ビジョンを実現するまでの過程を仮説として示したもので、プロジェクト参加者や多様なステークホルダーとの議論や、新たに得られた知見などに基づき、今後も必要に応じて改訂していくことを企図する。



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム

社会的孤立・孤独の予防と 多様な社会的ネットワークの構築

2023年度公募について(補足説明)

2023年4月



科学技術振興機構

SOLVE for SDGs 社会的孤立枠



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

SDGsの達成に向けた
共創的研究開発プログラム
(SOLVE for SDGs)



2019年度～ シナリオ創出フェーズ・ソリューション創出フェーズ

「社会的孤立・孤独の予防」に限らず、地域が抱える具体的な社会課題に対して、研究代表者と地域で実際の課題解決にあたる協働実施者が共同で、既存の技術シーズの活用による解決策（事業構想、事業計画等）を創出していくことを目指します。

（社会課題の解決のために活用する技術シーズがすでにあることが必須条件となります）

2021年度～ 社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築（社会的孤立枠）

「社会的孤立・孤独の予防」に関する研究開発であり、その要因やメカニズム理解、新しい社会像の描出といった人文・社会科学などの知見を使った学術的な研究から、社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法（指標等）、社会的孤立・孤独の予防施策の開発とそのPoC（Proof of Concept:概念実証）までを、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場と協働して一体的に実施します。

研究開発期間・規模/採択予定件数



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

◆研究開発期間・規模

研究開発期間：原則 **3年半**程度

研究開発費：**1,900万円/年**（直接経費）程度上限

※ただし、2023年度（令和5年度）に関しては、10月に研究開発を開始する想定ですので、年度末までの6ヶ月間の経費（950万円程度上限）を計上してください。

※2023年度（令和5年度）に関しては、本プログラムにおいて昨年度まで設定していたスモールスタート（可能性検証）期間は、設定がありませんのでご注意ください。

◆採択予定件数

3件程度（応募提案の内容・状況により、採択件数を調整します）

選考にあたっての主な視点(1)

選考にあたっては、以下のようなポイントを重視しながら総合的に検討した上で判断し、採択提案を決定します。提案にあたっては、公募要領「第2章 公募・選考にあたってのプログラム総括の考え方」および「第3章 研究開発プログラムの概要」を必ず参照してください。

a. プログラム趣旨との合致・プログラム目標への貢献

提案された内容（課題、目標、研究開発計画等）は**本プログラムの趣旨に合致し、本プログラムの目標の達成への貢献が期待できる。**

b. 意義・ビジョン

- ・ 解決すべき社会的孤立・孤独の予防に係る**具体的な問題とその社会的背景や原因等が適切に提示**されている。
- ・ どのような社会的孤立・孤独を予防の対象とし、どのような社会を目指しているのか、**そのビジョンが明確かつ適切**である。
- ・ 提案する研究開発の**新規性・独創性が具体的に**述べられ、国内外の関連する研究開発や取り組みの動向に鑑み**挑戦的**である。

選考にあたっての主な視点(2)



c. 計画の妥当性

- ・ 目指す**目標がアウトカムも含めて適切に設定**されている。
- ・ 目標の達成に向けて**計画（予算規模、期間、マイルストーンの設定やPDCA等のプロセス）が適切**である。
- ・ PoCの実施を含め、プロジェクトの目標達成に向けた**課題・障壁や困難さ等のボトルネックについて想定し、その対応方策についても具体的に検討**されている。
- ・ 社会の動向に対応した**適切な研究開発計画**となっている。
- ・ **多様な関与者からフィードバックを受ける計画**になっている。また、研究開発の節目において、公表等を行い**外部から適切に意見を集め改善すべき点を是正できる計画**になっている。

d. 実施体制の妥当性

- ・ 研究提案者は、**プロジェクト遂行のための実績**を有している。また、**構想の実現に必要な手がかり**が得られている。
- ・ 研究開発要素①②③を一体的に推進するに当たって、人文・社会科学や自然科学の研究者並びに**施策現場など社会の多様な関与者による十分な連携体制**が研究開発期間終了時まで**に構築される見込み**がある。
- ・ PoC実施のために、開発した**社会的孤立・孤独の予防施策等の効果を、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場で実証できる仕組み**が研究開発期間終了時まで**に整備される見込み**がある。
- ・ 研究開発終了後の発展も視野に入れた、**人的・資金的に持続可能な体制**が検討されている。
- ・ **機動的かつ効果的なプロジェクト・マネジメント**が期待できる。

選考にあたっての主な視点(3)



e. 研究開発成果のインパクトとその展開可能性

- ・ 提案する研究開発成果のインパクト（学術的・公共的価値の創出、現在および将来の社会・産業ニーズへの貢献、国内外の他の分野・地域への波及・展開など）やSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）の達成への貢献が見込まれる。

プロジェクトの選考・採択にあたっては、対象とする社会的孤立・孤独や分野等も考慮するが、さらに以下の点にも配慮することとする。

- ・ 国際的な視点から、国内外の研究動向の中に提案されるプロジェクトを位置づけたうえで、国際的にも有意義な成果の発信が期待できる。
- ・ 若手や女性の研究者の参加・活躍等、人材育成が期待できる。

選考スケジュール

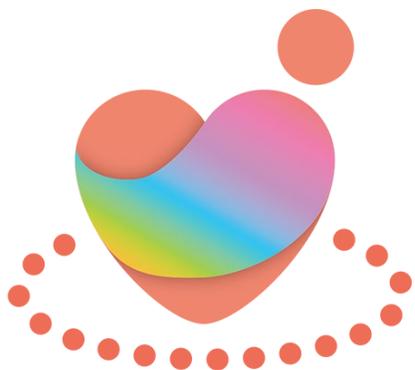


SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

募集開始	4月6日（木）
提案書受付期限（※）	6月7日（水） 正午 ※府省共通研究開発管理システム（e-Rad）での受付期限日時
書類選考期間	6月～7月（予定）
書類選考の結果通知	面接選考会の1週間前までに連絡（予定） ※面接選考対象の方は、「発表動画」・「発表スライド」や「面接選考に際しての事前確認事項への回答」を作成の上、面接選考会に先立ちご提出いただきます。
面接選考会	8月7日（月）、8月8日（火）
総括面談 （採択条件の説明）	8月25日（金）
選考結果の通知・発表	9月下旬（予定）
研究開発の開始	10月上旬（予定）

最新の情報は提案募集ウェブサイトをご参照ください。

https://www.jst.go.jp/ristex/proposal/proposal_2023.html



みなさまのご応募をお待ちしています。

提案〆切 : 2023年6月7日(水) 正午

問合せ先 : boshu-koritsu@jst.go.jp

**SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
「社会的孤立枠」募集担当
(科学技術振興機構 社会技術研究開発センター)**